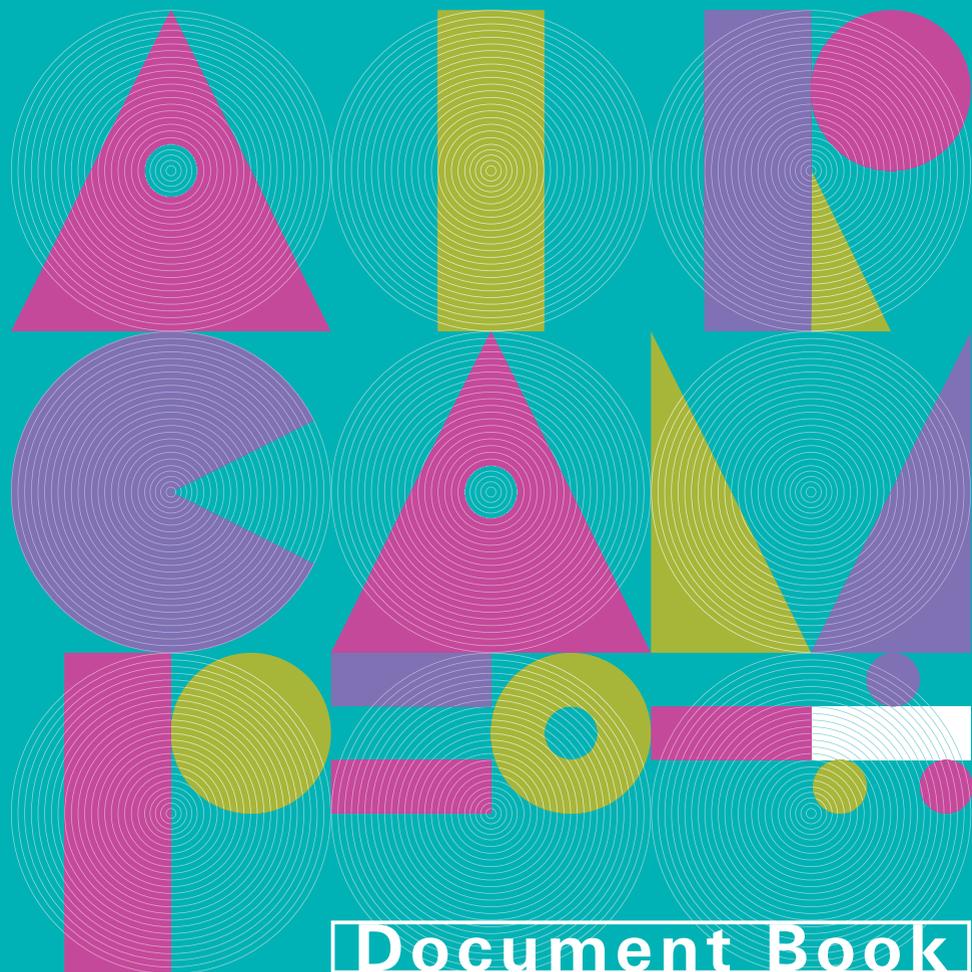


アーティスト・イン・レジデンスを始めよう!

# AIR CAMP 2016 冬

— 地域とのつきあいかた合宿ワークショップ —



**Document Book**

アーティストがいることから始まるプロジェクト

2016 December 16-18

## 芸術と生活をつなぐ“濃厚な時間”

柴田 尚 ..... p.1

## AIR CAMP 2016企画にあたって

小田井 真美 .....p.2

## About AIR CAMP 2016 Programme

Mami Odai .....p.3

スケジュール／参加者一覧 .....p.5

講師紹介 .....p.6

## AIR CAMP

**Report** トランスナショナルな文化のビोटープ  
プレゼンテーション：大澤 真雄 .....p.7

**Report** アーツ前橋と地域プログラム  
プレゼンテーション：家入 健生 .....p.8

**Report** アジアのアートマップづくりワークショップ  
プレゼンテーション：小川 希／チュアン・マミ .....p.9

**Report** まちづくりをベースにしたアートプログラム  
～アッセンブリッジ・ナゴヤという企てを通して～  
プレゼンテーション：古橋 敬一／吉田 有里／青田 真也 .....p.10

**Report** グループワーク「オープンダイアログ」 .....p.11

アジアフォーラム Asia Forum .....p.14

**Report** 福岡、アジア、黄金町  
プレゼンテーション：山野真悟 ..... p.15

**Report** アジア：アーティストたちのサバイバル  
プレゼンテーション：マーク・サルバトス／チュアン・マミ ..... p.16

**Report** Surviving in Asia  
Presentation: Mark Salvatus / Tuan Mami .....p.17

参加者レポート ..... p.18

**Pick up** アーティスト・イン・レジデンスのorganicな未来  
加藤康子 ..... p.23

## 実践派で行こう!!

東方悠平 ..... p.24

## Let's Get Active!

Yuhei Higashikata .....p.26

## 芸術と生活をつなぐ “濃厚な時間”

柴田 尚 (NPO法人S-AIR代表)

昨年に続き、今年も真冬の札幌でAIR CAMPである。

アーティスト・イン・レジデンス(以下AIR)に関心のある方を、受講生として全国からお招きしての二泊三日の合宿だ。初心者からプロのアート関係者、また、文化行政や助成金関係の方まで、さまざまな立場の人たちが集まった。今年は昨年と違って、受講生だけでなく講師陣も共にさっぽろ天神山アートスタジオに滞在し、合宿自体はさらに濃密な時間となった。

なぜ合宿スタイルにしたのかというと、作家出身ではないAIR運営者は、レジデント体験のない人が多いからだ。二泊三日と短い時間なのだが、自らがレジデントになる疑似体験をしてもらいたかった。

合宿の中では1時間かけて温泉まで行き、食事会もした。仕事とプライベートの垣根を超えて時間を共有するスタイルは、普段S-AIRが行なっている作家のアテンドそのものだ。自らが作家の友人となり、一緒に遊び、会話をし、他の人間関係づくりを手伝い、土地の空気を感じてもらい、それを作品に活かしてもらおう…その追体験をしてもらおうという意図もある。

今年はテーマに“アジア”や“コミュニティ”があることもあり、さまざまな地域から講師をお迎えした。二回目となる今回の企画は、合宿会場にもなっているさっぽろ天神山アートスタジオのAIRディレクター小田井真美さん。東京からは、東南アジア9カ国、83カ所のアートスペースをリサーチしたばかりというArt Center Ongoingを主宰する小川希さん。名古屋の港まちづくり協議会事務局次長の古橋敬一さん、群馬からアーツ前橋学芸員の家入健生さん、現在、福岡在住のニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室研究員の大澤真雄さん、また、日本の地域における

アートプロジェクトの先駆けであり、アジアのアートをいち早く紹介した横浜の黄金町バザールディレクターの山野真悟さんをお迎えした。全国各地のさまざまな地域の課題、AIRの組織形態や運営方法など、そのバリエーションが多様になってきているのを感じた。

海外からのゲストには、小川さんの紹介によりベトナムからチュアン・マミさん、フィリピンからマーク・サルバトスさんというASEANの国々のアートスペース運営者を招いた。

いわゆる本格的なアーティスト・イン・レジデンスがほとんどない、東南アジアからの海外ゲストに焦点を当てることは難しいのではないかという懸念が、CAMPの企画中に何度か出た。しかし、結果としてよかったと思っている。なぜならば、AIRは「芸術をしながらどうやって生活を創るか」という、アート関係者にとっては世界共通の根本的な問題に直結しているからだ。

文化助成がなく、表現の自由にも制約がある国の多い東南アジアでのアートライフは、強烈なサバイバル意識の上に成り立っていた。“芸術と生活”をつなぐための強い意思と工夫。彼らの創り出す「Collective(集合体)」という“フラットでゆるい”コミュニティの特徴は、日本の文化の未来にもつながってくるのではないかという気配を感じた。もしかしたら、AIR CAMPという集まり方自体もそのスタートなのかもしれない。



## AIR CAMP 2016企画にあたって

小田井真美  
(さっぽろ天神山アートスタジオ AIRディレクター)

アート活動がアート専用の場から飛び出して実施されるようになった1990年代以降、まちの中、人々の生活の場とアート活動やアーティストが隣り合わせに存在することが当たり前になってきました。見知らぬ隣同士のままでいるよりも、知り合い、折に触れて交流できる気ままな距離感を保ちながらお互いに存在していければ、より豊かではないだろうかとの私的な期待とともに日々を生きています。近年、開催地域の大小を問わずたくさん開催されている日本各地の芸術祭、国際展もまた、サイトスペシフィックな作品の成立を期待するものや、開催地の住民との共同制作、参加を前提にした参加型プロジェクトによって構成される事業が散見されるなど、現在の日本ではアーティストの滞在制作を伴うアートプロジェクト型の事業が増えています。

これらの様相は、1990年代から日本国内に広がってきた政策上の「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」事業や、アートNPOの活動や拠点とリンクしています。また、地域資源の再発見や増加する空き家、遊休施設活用の解決策として、地域おこし協力隊や首都圏から移住する若い世代によるゲストハウスの運営が始まるなど、地域、新旧住民の双方の切実なニーズを反映した「場づくり」の提案と実践もあります。これら行政をはじめとする個人や民間団体の動向には、アート活動、特に「アーティストの移動と滞在と制作活動の場の提供」が取り込まれて、新たなAIRを生み、SNSでの情報発信などにより都市圏、過疎地域を問わずAIR一地域にアーティストがいることは、存在感を強めてきています。

今の日本には国内外のアーティストが活動をする多種多様なチャンスがたくさんある、ということです。こ

の状況がいったいどういうことなのかを事業運営者やアーティストが自己検証するタイミングでもあるかもしれない。

文化芸術事業やアーティスト自らが地域のひとりであると自覚することから生まれる活動に、地域の人々が遭遇する体験を積み重ねることで、地域は多様な人々が同じ時、同じ場所にいることを意識し合うようになるでしょう。そうして地域、人々に新しい価値観(視点)をもたらすことになる。この状態が地域の人、個人の中で新しく小さな活力となり、一人ひとりの活力が地域の再生や発展に後々つながるのではないかとポジティブかつ強引な仮説を私は立てたいと思います。

### プログラムについて

昨年度から始まったAIR CAMPの2回目となるこのプログラムでは、枠組みとしての、また政策サイドから見たAIRについてだけでなく、「そもそもAIRとはなにか」という議論じゃなく、もっともっと手前の話、つまり、「アートが、アーティストがこの世界でサバイバルするにはどうすればいいのか」、「地域にアーティストがいることは一体どういうことなのか」、そしてAIRがその方法論として使えるのかどうか、ゆっくり考えたいと思い企画しました。そんなことを確認することは、最も豊かな有り様だと私自身が考えている『AIRの多様性』を死守する方法なのかもしれないと考えたためです。

プログラムのチューターには、日本と同様に西洋型ではない、私たちならではの生き方、コミュニティのあり方、文化由来の活動を模索しているアジアのアート現場実践者(アーティストでありアートコレクティブ運営者)を迎えることを決め、私を含めたAIR CAMP

## About AIR CAMP 2016 Programme

Mami Odai  
Director at Sapporo Tenjinyama Art Studio

参加者が自分たちの行っている活動と、彼らの活動とを照らし合わせながら〜文化芸術事業・アーティストの活動と地域・コミュニティのつきあいかた〜を再構築する機会となることを願いました。その上でさらに、日本各地の現場で奔走する講師とチューター各位、ゲストからそれぞれご自身の活動を紹介してもらおうプログラムを配置しました。

私たちの実践やアイデアを再構築するために、講師、ゲスト、チューターと参加者との対話に多くの時間を費やしました。対話ではいつもの立場はくるりくると入れ替わります。実際にやってみて、こうした暑苦しくどこか無責任で親密な時間を持つのは「キャンプ」の醍醐味だったと実感しました。「レジデンスとは関係性をつくることだ」とは講師の小川希の発言ですが、このプログラムを通じ、講師、ゲスト、チューターと参加者、運営チームの私たちそれぞれが好き勝手に関係性をつくり上げることができたと感じます。レジデンスがレジデンスに行くチャンスになったのです、たったの二泊三日だったけれど。

AIR CAMP 2016で立ち上げたプログラムアーカイブのウェブサイトから、プログラム内で使用された講師、ゲスト、チューターの資料等を閲覧することができます。

**AIR CAMP 2016**  
<http://s-air.org/aircamp/2016archive/>

**AIR CAMP 2015**  
<http://s-air.org/aircamp/2015archive/>

構築：永井雅人 ディレクション：小田井真美

Since the 1990s, when art practices started to present more in public spaces, away from the existing art gallery and museum systems, it has become customary for artists and art practice to meet the lives of ordinary people.

In such a context, I personally live everyday with the great hope that artists and the rest of us can live together in our community; indeed, that sometimes we can establish friendships to support each other and no longer be strangers. In this way, our life becomes very rich.

In Japan, the number of project-based art works is growing. It often demands artists to stay a period of time and produce work on site. This is due to the widespread flourishing of international as well as regional art festivals happening in various parts of Japan that call for site-specific art works, collaboration with local community and projects preconditioned on involvement of artists in the community.

These trends also link to the programme of Artist-in-Residence which was established and spread through in Japan in the 1990s.

Furthermore, as a regeneration of local resources and as a solution to the growing numbers of vacant houses and idle facilities, regional community revitalisation teams and members of younger generations propose and realise the creation of platforms, such as guest houses. These actions reflect urgent requests of old and new residents of communities, and

happen as a phenomenon distinct from Japan's conventional AIR network.

Some of the programmes organised by these different sectors, such as regional governments, private organisations and individuals, have recently been more recognised as a new area of AIR programmes, providing support for the mobility, accommodation and production of artists. In other words, both domestic and foreign artists have many more chances of encountering diverse types of programmes in current Japanese art industry.

As a consequence, artists live in communities all over Japan. Each resident artist in the community will start to recognise themselves among the residents of the community: concurrently, through their experiences with art projects and art-cultural programmes, residents of the community will start to recognise various backgrounds and types of people living side by side. This will bring a new value (and perspective) to individuals as well as the community as a whole. I would love to make the positive and forceful assumption that this situation brings out minor but new power from individuals, and this individual power brings revitalisation and development of local community.

### About the Programme

This year's second annual AIR CAMP programme seeks to shift the discussion away from questions of AIR itself as a system and as an organisational structure, and instead to position attention more directly toward much more fundamental issues like, how do Japan's art and artists survive in this world? and what is the value and significance of artists living in local communities? Over the course of two nights and three days of discussion and exchange

programmes, art project organisers and participants explored whether AIR is the methodology to address the above questions. Examining and evaluating each project is the way to defend the diversity of AIR, which is a very valuable form of art project.

AIR CAMP offered presentations by artists and artist collective managers of Southeast Asia. During this session, each participant and organiser reflected on their own project to discuss and exchange on issues of artist projects and local communities, art and cultural programs, in search for survival in managing art projects originating in wider cultural activities. This included the topic of how to live our way (a non-Western way) of life, how to build community, how to work with community. Then, some more presentations and discussions followed, such as research into Southeast Asian alternative art initiatives and spaces as well as significant art projects from different parts of Japan.

Most of the time in the symposium was spent in dialogues between lecturers, guests from Southeast Asia, tutors and participants toward rebuilding their ideas and activities. In dialogue, each position swapped and reswapped constantly. In this programme, it was a real pleasure to luxuriate in time spent in dialogue, even to excessive points, somewhat irresponsible but intimate. In one of these sessions, one of the lecturers, Nozomu Ogawa (Art Centre Ongoing from Tokyo) mentioned that "Artist-in-Residence is for building relationships." Indeed, everyone including lecturers, guests, tutors, participants and organisers built relationships in their own way by the end of programme. In just two nights and three days AIR CAMP established the Artist-Organisers-in-Residence.

### AIR CAMP 2016 スケジュール

Day 1

#### 12.16 Friday

- 13:00 参加者がさっぽろ天神山アートスタジオに集まりスタート  
プレゼンター、ゲストや参加者の自己紹介
- 15:00 レクチャー(大澤寅雄)
- 18:00 市内温泉施設へ移動してグループワーク①
- 22:00 夜のプレゼンテーション(家入健生)

Day 2

#### 12.17 Saturday

- 10:00 グループワーク②
- 14:00 ワークショップ(小川希、チュアン・マミ)
- 16:30 プレゼンテーション(古橋敬一、ほか)
- 18:30 アジアフォーラム@澄川地区会館  
プレゼンテーション&ラウンドテーブル  
(山野真悟、マーク・サルバトス、チュアン・マミ、小川希)※一般公開プログラム
- 21:00 交流会

Day 3

#### 12.18 Sunday

- 10:00 グループワーク③
- 13:30 参加者プレゼンテーション、講評
- 16:00 終了/解散



### 参加者一覧

#### プレゼンター/ゲスト

小川 希  
古橋 敬一  
マーク・サルバトス  
チュアン・マミ  
家入 健生  
大澤 寅雄  
山野 真悟

#### 参加者

吉田 美穂  
佐脇 三乃里  
蒲原 早奈美  
柳沢 拓哉  
加藤 康子  
ラナ・トラン  
藏田 章子

中里 龍造  
斎藤 ふみ  
松田 仁央  
漆 崇博  
鈴木 萌  
小林 大賀



講師

**小川 希 Nozomu Ogawa**  
Art Center Ongoing／東京

1976年東京生まれ。2001年武蔵野美術大学卒。2004年東京大学院学際情報学府修士課程修了。2002年から2006年に亘り、大規模な公募展覧会「Ongoing」を、年一回のペースで企画、開催。その独自の公募システムにより形成したアーティストネットワークを基盤に、2008年に吉祥寺に芸術複合施設 Art Center Ongoing を設立。現在、同施設代表。また、JR中央線高円寺駅〜国分寺駅区間をメインとしたアートプロジェクト「TERATOTERA (テラトテラ)」のチーフディレクターも務める。2016年、総勢45名からなるアーティスト集団 Ongoing Collective を結成。



チューター

**マーク・サルバトス Mark Salvatus**  
98B COLLABoratory／フィリピン

1980年マニラ生まれ。マニラ／大阪を拠点に活動。ヴァーガス美術館、アテネオ・アート・ギャラリー、フィリピン文化センター、ドローイング・ルーム、1335マビニ (以上マニラ)、ラ・トロップ大学ビジュアルアートセンター (ビクトリア州／オーストラリア)、アートセンター オンゴーイング (東京)、高陽アートスタジオ (韓国) 等で個展開催。作品やプロジェクトはベネチア建築ビエンナーレ フィリピン館 (2016)をはじめ、国際的なグループ展でも多数発表している。フィリピン文化センター第13回アーティスト・アワード (2012) およびアテネオ・アート・アワード (2010) 受賞。また、2006年にはマニラを拠点とするストリートアーティストのコミュニティであるフィリピン・ストリート・プラン、2012年には創造的な共有・議論・協働を目指す分野横断的な場として98B COLLABoratoryを共同設立している。



チューター

**チュアン・マミ Tuan Mami**  
Nhà Sàn Collective／ベトナム

1981年ハノイ生まれ。2006年ハノイ美術大学卒業。クリエイターとして活動する一方で、MACハノイ (モバイルアートセンター) を2012年に設立。Nhà Sàn Collective アートスペース (ハノイ) 共同設立者 (2013)、サンフランシスコ・アート・インスティテュート客員研究員 (2013)。表現における新しいメディアと方法を継続的に探求している。制作は、異なる分野の異なる方法、例えば人類学や社会研究などを取り入れ、インスタレーションや映像、パフォーマンス、コンセプチュアルアートを用いながら、ますます沈黙的な実験状態になっている。近年、私的空間・公的空間両方における、パフォーマンス性のある複合インスタレーションの実験を開始。作品はしばしばサイトスペシフィックで再構築的な考え方にに基づきながら、人生についての問いや意味、人間同士の社会的相互作用を扱うものであり、つまり、ある特定の現実にある人や物を、社会過程においてアーティストと関わるように引き込む状況を再構築する。



チューター

**古橋 敬一 Keiichi Furuhashi**  
港まちづくり協議会／名古屋

1976年、愛知県生まれ。2008年より港まちづくり協議会事務局次長。名古屋学院大学、愛知淑徳大学等にて非常勤講師。博士 (経営学)。学部時代にアラスカへ留学。帰国後、大学院へ進学すると共に、商店街活性化のまちづくり、愛知万博におけるNGO/NPO 出展プロジェクト、国内および東南アジアをフィールドにするワークショップのコーディネーター等の多岐にわたる活動に従事。多忙かつ充実した青春時代を過ごす。人と社会とその関係に関心がある。



チューター

**家入 健生 Kensei Ieiri**  
アート前橋 学芸員／群馬

1987年熊本県生まれ。2011年立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。在学中よりNPO法人 BEPPU PROJECTにて、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2009/2012)、国東半島アートプロジェクト (2012) の作品制作や、ダンス・音楽公演の制作、アーティスト・イン・レジデンスの運営などに携わる。2013年よりアート前橋にて地域アートプロジェクトや滞在制作などを担当するほか、アーティストとともにアトリエ・展示のためのスペース Maebashi Works の運営や、前橋中央通り商店街理事など。



ゲスト

**大澤 寅雄 Torao Osawa**  
ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室／文化生態観察

1970年生まれ。㈱ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室准主任研究員、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー、NPO法人STスポット横浜監事。慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員を経て現職。共著『これからのアートマネジメント「ソーシャル・シェア」への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリスト』。



ゲスト

**山野 真悟 Shingo Yamano**  
黄金町バザール ディレクター／横浜

1950年福岡県生まれ。1978年よりIAF芸術研究室を主宰、展覧会企画等を行う。1990年ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局局長に就任。1990年より隔年で街を使った美術展「ミュージアム・シティ・天神」をプロデュース。「まちとアート」をテーマに、プロジェクトやワークショップ等を多数でがける。2005年「横浜トリエンナーレ」キュレーター。2008年より「黄金町バザール」ディレクター、翌2009年黄金町エリアマネジメントセンター事務局局長に就任。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

Report

## トランスナショナルな文化のビोटープ

プレゼンテーション：大澤 寅雄

1990年代、日本におけるAIRの導入は、もっぱら“国際交流”という切り口からなされていた。それから20年経った現在、国内における芸術文化の受容、地域社会へ入り込むアーティスト、社会の変化に応じるように広がった市民プロジェクトなどとともに、AIRの姿も変化している。では、今日関心の集まる〈地域と結びついたAIR〉とはどのようなものだろうか。大澤寅雄氏のレクチャーでは、まず彼が在住する福岡市糸島における〈AIRのある地域の日常〉が紹介された。

糸島にはStudio Kuraという民間運営のAIRがあり、米蔵を改造した施設にアーティストたちがやってくる。糸島のまちを探索し、暮らしを楽しみ、定期的に作品展示も行われている。また、Studio Kuraを含む地域の美術家たちで運営する糸島国際芸術祭「糸島芸農」では、海外アーティストのクオリティの高い展示の一方で、地域のアーティストの作品に住民が参加したり巻き込まれたりした結果、お年寄りが元気になってしまうなど、地域と良い関係を結んでいる様子が伝えられた。

ここでAIRという活動を考えるために『「J」演劇』の場所 トランスナショナルな移動へ』(著 内野儀)が引用される。アーティストにとって移動とはどのような意味をもっているのか。この「トランスナショナルな移動」すなわち、移動しているアーティストやキュレーター、プレゼンターらが「トランスナショナルなネットワーク形成を模索するプロセスで、リゾーム状でアトランダムな接続を、さまざまな個人、組織、場所、有形無形の文化と果たしつつあること」「作品を移動させながら熟成していくこと」について、ダンサー手塚夏子さんの活動である「Floating Bottle Project」と照らし合わせながらの解説がされた。シンプルなインストラクションだった作品が、一旦アーティストの手を離れ、他の人の手

やいくつかの場を経て発展し、コラボレーターを伴って本人の元に戻ってくるようなイメージであった。作品とアーティストたちが、移動と出会いを重ね、偶発的に関係を結びながら育つ。もちろん偶発といっても、その作品や作家がなにかしら人に影響を与え、惹きつける力を秘めているからこそ起こっているに違いない。

ではこのサイクルを、AIRやコミュニティの立場で考えるとどうなるのか。大澤氏は、AIRが多面的、多元的な効果・成果をもたらすこと、中長期的な時間軸の中でより大きなインパクトを生み出していくことを示した上で、「芸術の生態系を支える重要なインフラである」と位置づけ、「AIR生態系」というモデルを提示した。これは美術家・藤浩志氏の「PLANTS! 概念図」を発展させたアイデアであり、植物の育成に水や光や土が必要であるように、芸術文化も芽が出て栄養を得て成長し、地域や社会へ循環されていく様子は、まさに生態系と合致するのである。

これからのAIRを担う人は、この芸術生態系のどの場所に立とうとしているのか、地域に向き合うための地図として大いに役立ててほしい。(レポート作成：大友)

Studio Kura [www.studiokura.info](http://www.studiokura.info)

糸島国際芸術祭 糸島芸農 [www.ito-artsfarm.com/](http://www.ito-artsfarm.com/)

『「J」演劇』の場所 トランスナショナルな移動へ』内野儀 著  
東京大学出版 2016

『諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業』  
株式会社ニッセイ基礎研究所 (平成24年度文化庁委託事業)  
[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_nakusho\\_shuppan/tokeichosa/pdf/artist\\_houkoku.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_nakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/artist_houkoku.pdf)



## アーツ前橋と地域プログラム

プレゼンテーション：家入 健生

### 地域プログラム

アーツ前橋は、地域アートプロジェクトを活動の主軸の一つに据えている美術館である。「アートプロジェクトを通して、地域の課題や日常生活と、アートが持つ想像力が会合うことで新しい出来事をつくり出していくこと」をミッションとして掲げ、2013年10月の開館前より取り組んでいる。アーツ前橋にとっては、前橋の都市部や農村部、赤城山など市全域が活動のフィールドであり、美術館から離れた場所にも活動を仕掛けていく。その領域も衣食住をはじめ、歴史など、柔軟で多岐にわたる。この「アートプロジェクト」とは日本の多くの美術館がオープンした20～30年前にはなかった言葉であり、館外活動を想定しない従来の美術館にとって、それを行うことは容易ではないだろう。

「地域にどんな人材がいるか、アートに興味のある人や地域に詳しい人がどの程度いるのかを見つけていったり、どんな場所になったら良いのかなどを考えたりしてきた」と話す家入氏。拠点である美術館のおかげで、プロジェクトが有機的に次の事業へつながっているという。プロジェクトがたくさん派生物を生み出しながら積み重ねられていることが、プロジェクト展開図から想像される。

### アーツ前橋のAIR

アーツ前橋では、アーティスト支援事業として開館前に行っていたアワードを見直し、2014年より「アーティストに対し、作品制作に必要な時間と空間を提供する」AIRに力を入れた。3つの枠組みとして「海外在住アーティスト」「国内在住アーティスト」「群馬県にゆかりのあるアーティスト」があり、特に「群馬県ゆかり」は、出身地や在住だけでないさまざまな“ゆかり”も対象とする。群馬県

に対するユニークなアプローチが少なからず寄せられている模様。また、滞在成果物として作品ではなくアイデアを残してもらうなど、フレキシブルで継続性ある工夫が随所に盛り込まれている。AIR施設を美術館内ではなく町中に設置したことは、周辺に地元アーティストや若者の拠点がができる動きが起きるなどの変化をもたらした。さらにはAIRのコーディネートを地元の団体とともに行うなど、美術館で完結せず、地域の人々が入り込む余地や協働を模索していることがうかがえる。

### Maebashi Works

Maebashi Worksは商店街の中にある、家入氏や地元アーティストを含む9人のメンバーで運営するアトリエ兼ギャラリーで、彼が住む建物の空室を活用し、自分たちで改装も行ってレジデンスとしても提供している。アーツ前橋のAIRと違い、基本的に滞在場所と制作場所の提供のみというスタイルで、希望者は口コミや紹介でやってくる。美術館として地域に協力を要求するばかりではなく、自らそこに身を置くことで地域との別のつながり方も試みている。「前橋はローカルでコミュニティも大きくない。地元の作家たちや地域の人との関わり方なども考える必要がある」と言う。商店街の理事をやったり、作家たちとNPOをつくって一緒に活動したりするなど、いろいろな立場や肩書きを自分でつくりながら、地域に集まる多様な立場の人たちと同じ目線でプロジェクトをつくっていきたいとの姿勢がある。(レポート作成：大友)

アーツ前橋 <http://artsmaebashi.jp/>



## アジアのアートマップづくり ワークショップ

プレゼンテーション：小川 希/チュアン・マミ

小川希氏は、アジアとの交流やArt Center Ongoingと同じくインディペンデントな活動を行う東南アジアの「コレクティブ」への関心からリサーチを思い立ち、2016年1～4月に90日間で9カ国24都市83スペースを訪れている。このワークショップでは、彼のリサーチを元に東南アジアのアートシーンについて話し合った。

最初の訪問先 98B COLLABoratory(マニラ)では彼らの紹介でどんどん次の訪問予定が決まる。訪れる先々でこうした協力があり、まずは東南アジアのアートシーンの「ハンパない」横のつながりが判明。国を超えて盛んな交流があった。

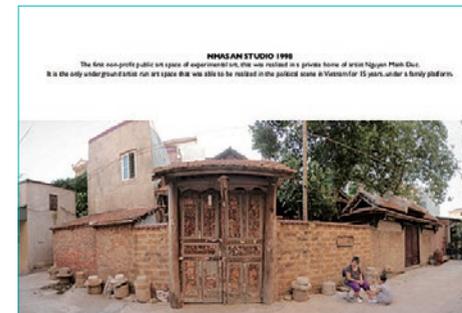
そしてたくさんのコレクティブ。巨人の祭の町で活動するNeo-Angono(アンゴノ)は町全体がアートプロジェクト。研究者のコレクティブ KUNCI(ジョグジャカルタ)はアートに関係なく誰でも気軽に出入り出来るオープンな場所を提供している。小川氏がコレクティブの「一つの完成型」と評したruangrupa(ジャカルタ)はギャラリーやカフェ、AIR、ラジオ局、アートフェス、子どもワークショップ等たくさんの事業を手掛け、助成金や企業のサポートも獲得し、まるで会社のような。その活動をメンバー30人がヒエラルキーのない関係で実現していることに驚かされる。New Space Arts Foundation(フェ)の双子Le Brothersが、アーティストなのに「白人がつくった現代美術はFUCK」と繰り返すのは、ベトナム人としてのアートについて考えているから。New Zero Art Space(ヤンゴン)やSa Sa Art Projects(プノンペン)は、貧困や文化の喪失など深刻な状況にある人々がアートに触れることで生きる希望を持つために、子どもたちに造形を教え、AIRを運営している。

紹介されたコレクティブの特徴は、同じ志を持つ人が集まり運営しているが、チーム内にヒエラルキーがなく、全員がイコールの関係にあること。「オーガニック＝適当」なあり方。

最後にチュアン・マミ氏よりNhà Sàn Collective(ハノイ)が紹介された。表現活動が制限されるベトナム。第一世代のスタジオは、アンダーグラウンドなアーティストスペースとして1998年に創設者の自宅が始まった。お互いを助け合う一番良い方法として毎日のように集まって話したり飲んだりすることが大切という。第一世代は10年ほど続いたが政治的問題で終了。2008年頃よりマミ氏らの第二世代が、国際的な交流や、より新しい活動に取り組んでいる。2013年にコレクティブを結成。ワークショップや上映会、AIRなどを行ってきたが、成功して注目されることで政府の目に留まってしまい、何度も移転している。AIRはベトナム全土から多くのアーティストを受け入れ、学校や文化機関、ボランティア等と協力しながら行っている。マミ氏は最後に「常に自分たちの社会や若いアーティストたちをサポートするために活動している。」と強調した。(レポート作成：大友)

### 東南アジアを理解するための5つのキーワード

- コミュニティ
- オーガニック
- ネットワーク
- インディペンデント
- シェア



©Tuan Mami

## まちづくりをベースにしたアートプログラム ～アッセンブリッジ・ナゴヤという企てを通して～ プレゼンテーション：古橋 敬一 / 吉田 有里 / 青田 真也

「よくある課題解決型まちづくりに限界を感じていた時に、アートに出会った。解決する課題を探すより、アートによってまちが揺さぶられ、人々が自ら問題を発見することの方が面白いと思っている」（古橋氏）

港まちづくり協議会（以下、協議会）は2006年に発足し、そのアートプログラム「Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]」は2015年秋にスタートした。彼らの活動を通して、各地で盛んなまちづくりとアートのパートナーシップについて、改めて考えてみたい。

彼らの活動の舞台は、名古屋の港まちである。名古屋港は、現在でも総取扱貨物量日本一を誇る産業港である。しかし、その後背地である港まちの様子は、ここ数十年の間に様変わりしてきた。かつての港まちには、外国船の船員や港湾労働者達が闊歩し、異国情緒の漂う風景が広がっていたが、現在は遊園地や商業施設が整備され、観光地化が進み、働く人々もホワイトカラーのサラリーマンが中心となっている。街が姿を変えていった大規模開発の過程で、参加型のまちづくりも盛んに行われてきたが、これも時代の変化と共に、行政主導の開発が完了すると共に終了となった。そんな時、ポートピア名古屋を誘致し、獲得した補助金を活用した新たなまちづくり事業がスタート、協議会が発足した。

協議会は、発足から5年後にビジョンを作成している。「当初は、まちづくりの課題が見えないことが課題だと思っていた」と古橋氏。打ち出したコンセプトは「なごやのみ(ん)なとまち」の実現、つまり、地域住民だけでなく名古屋中からやって来る全ての市民との協働を目指すまちづくりとした。暮らす・集う・創るの3つのテーマなど明快な設定で、10年後を展望する事業となっている。

防災活動や祭、ツアーイベントなど楽しげな活動の様子が紹介された。しかし古橋氏にとってはまだ不十分に思われたと言う。街の人達が自分たちから動き、主体的なまちづくりを展開していくためには、何かを変えなければならぬと考えていた頃、吉田有里氏と出会った。

MAT, Nagoyaは、吉田氏 青田氏を含む4人体制で、港まちポットラックビルを拠点に展示やスクール事業、空き家活用事業などを実施している。MAT, Nagoyaでは「アートそのものは、まちを変えるためには存在していません。」とその本質を伝えた上で、その結果が街に良い影響を及ぼすとしてプログラムを行っている。2016年は名古屋市と連携し「アッセンブリッジ・ナゴヤ2016」を開催。約1km圏内に点在するアート作品を観て回ることによって街を楽しむ仕掛けになっていた。

また、青田氏によれば、あいちトリエンナーレ（以下、あいちトリ）へ2回にわたって関わる中で、その3年に1度という開催期間外に何か継続的なことを行う必要を感じたことがMAT, Nagoyaに反映されていると言う。そこには、一過性のイベントではなく、アートとまちづくりの継続的で発展的な関わり方を真摯に追究する姿勢が見てとれた。（レポート作成：大友）

港まちづくり協議会  
http://minatomachi.jp  
Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]  
http://www.mat-nagoya.jp



© 港まちづくり協議会

## グループワーク 「オープンドialog」

本合宿では、参加者たちが「地域とのつきあいかた」において日頃抱えているモヤモヤとした課題やアイデア・想いを実現する手立てを見出すために、第一線で活躍する講師たちとの質問・意見交換の場が設けられた。最終日に参加者は、合宿の成果や気づき、感想をそれぞれの言葉にしてプレゼンテーションを行った。

### 2日目「オープンドialog」まとめ

#### それぞれのAIR

レジデンスは一番お金にならない。お金ではなく関係性をどうつくっていくかとするかを問題にしている。（小川）

AIRのサービスの対象は誰か？ Ongoingは何より滞在アーティスト。黄金町のAIRはアーティスト支援の他、エリアのポテンシャルを上げるための投資として税金が使われ、黄金町の可能性・異物に対する耐性・受け入れ能力の向上、エリアのブランディング効果も考えられる。（加藤）

3331は、地域に現代アートを教えるのではなく、現代アートとの交流が出来る場。地域で何かやってみたいと応募するアーティストが半分近い。地域もアートの側にいろいろ教えてくれて、アーティストにとってもそれを体験することが大切。どこまで地域のためになる活動かではなく、どこまで周りの人との関係をつくれるか。（トラン）

はっちは、地域活性化のため。中心街が寂れてきたのでそこを元気にするために作られた。また、中心街だけでなく八戸市全域を視野に入れた事業もある。（柳澤）

Ongoingは資本主義に合致しないアーティストがどうサバイブするかが一番大きなテーマ。商業ギャラリーや教育機関に入り込めないが面白いことをやっているアーティストがたくさんいる。彼らが自分一人だけではないと感じ、続けることができる。そのためにあるような場所。（小川）

黄金町は1年2年と長期利用のアーティストもいて、完全に生活者みたいな感じ。現在40数名いて、協力し合う時もあるがベンカもあって町内会のように。（山野）さっぱり天神山アートスタジオのAIRは、セルフファンディング、国際公募、ネットワーキングの3種類がある。（漆）

#### 黄金町の新たな問題

黄金町エリアマネジメントセンターは実はアートNPOではない。まちづくりNPOとして防犯や防災、地域の経済的再生など全てを担っている。最近の問題は、これまでNPOがあらゆる役割を担い過ぎて、まちづくりを引き継ぐ地域の若い人が育っていないこと。ある時点までは我々のNPOによって成果をあげたが、地域がNPO依存症になり自治意識の衰退が起きてしまうことは大きな問題。地域住民が強い想いでしっかりプレッシャーをかけないと再び売春店舗が出来てしまう可能性もある。NPOの役割は全てを担う



ということではないので、自治意識を作り直すことが重要な課題になりつつある。住民は地域のことをもっとがんばってほしい。(山野)

#### 私たちが“地域”と呼んでいるもの

アジアと日本のコミュニティが決定的に違うのは規模感。東南アジアでは小さく自分たちの手の届く範囲の地域というのが存在しているから、アーティストたちはその中で何をすればいいのか考えたり問題解決したり出来る。でも日本で“地域”と呼ぶものの規模は、実はとても大きい。近代になり人が増え小さい地域が破壊されて大きくなって、そこに暮らしている人の顔が分からない状況。(小川)

地域でプロジェクトをやる際、顔が見えない人たちに対して、地元の人たちの代わりにぼくらが足を運んで、少しは顔の見える関係をつくったり場を設けたり働きかけたりしなきゃいけない。(漆)

自分たちのことを自分でやるのが本来の町内会のはず(大友)

とくに今の時代だと目的型コミュニティがとても広がっている。(漆)

昔は自治会が機能していて、公民館や子供会など世代を超えて人が関わり合う環境が多少なりともあったが、今では自治意識をもった集まりは商店街で将来

を憂いている人が数人。昔のようなつながりを担保にした機能はもう失ってきている。僕らが特に町や地域アートなどを考えた時、自治意識の回復が非常に大きな問題。でもやっぱりそこでつまずく。(漆)

Ongoingは東京に住むアーティストのコミュニティを担保している。武蔵野市だけでなく東京中のアーティストが集まって来られる場所。アーティストのコミュニティを守り、そのコミュニティに対してどう機能できるか。(小川)

#### AIRの実務・運営

地域とアーティストの間に入らない方が自然な関係が築けることもあるかもしれない。ケースバイケースなので、サポートが必要かどうか滞在前に予め確認するようになった。(トラン)

スタッフが行くとき身構えて話を聞かない商店街が、アーティストが行くことでウェルカムになったりする。(柳澤)

学生がはっちで発表することでその周りの人たちが見に来るなど、市の広報では届かない人たちに対してアーティストによって開拓されるところがある。(柳澤)

最近増えてきたゲストハウスとの差別化をどう考えるか。(加藤)

#### アートは“地域”に対して何ができるのか

小さいコミュニティが小さいままで終わるのではなく、常に誰でも入って来られる準備はしておいた方がよい。何かしら人がアクセス出来て、そこで何をやっているか常に開示していることが、そのコミュニティが広がっていく可能性になるし、他のコミュニティが問題を抱えている時に参照してもらえる。(小川)

レジデンスをやれば地域が活性化するなんてあり得ない。ある一部の人がレジデンスをしたことで関係性を持って、そこで何かしらが変わっていくという一つ一つの小さいモデルを大切にせず育てていくしかない。(小川)

東南アジアの“地域”といっても、その小さいつながりを大切にしているだけであって、アートが機能しているように見えてもアートなんて全く関係ないという人たちが全然多い。(小川)

台湾では小さなコミュニティの中でアーティストが機能して影響力を持つということがあり、そこから国に対して反対運動をしていたり、何かに対して抗うことをしているのが印象的だった。(漆)

アーティストが夜な夜な八戸の横丁の飲み屋へ繰り出して騒ぐことでパラダイス的な雰囲気があるところに創出されたら、それだけでもレジデンスをつくる意義があるのではないか。(柳澤)

外国人としては、日本に来て単に楽な経験をして意味がないと思う。悩んだり考えたりしないと意味がない。(トラン)

おじいさんが犬を連れてると、犬に話しかけることで東の間の会話が起る。昔と違いただ道を歩いているだけでは迂闊に人と関われない。地域や社会の中でアートを通じて安全な会話、安全なコミュニケーションが実現するという点ではアートの存在もおじいさんの犬と同じではないか。地域や社会でアートが必要とされている。

(加藤)

子育てをしている身としては地域の力を借りないと。地域に頼りたいという気持ちがある。(吉田)

#### 地域とアートの不透明な関係

地域とアートはどんなに頑張っても透明な関係にはならない。不透明な関係だからこそやり続けていく。だからといってアートの社会的役割は逆にあり過ぎるくらい。地域の人々にとってアートが不透明であるからこそ、何らかの影響を与えたり、いろいろなことが起こっている。もし彼らが「透明な関係じゃない」と言えたとしたら、それはアートのことを理解していることだと思う。(山野)



## 福岡、アジア、黄金町

プレゼンテーション：山野 真悟

山野さんのレクチャーでは、「地域アート」「まちづくりに絡んだアート・フェスティバル」「アートがどんどん外に出て行った時代」「アーティストがある場所に一定期間滞在しながら作品をつくるレジデンス」の原型でありモデルを示す山野さんと福岡という場所が創ってきたプロジェクトの歴史、その当時の国内・世界のアートの同時代的な動向を追いかける時間の中で、現在活発に展開している多様なアートプロジェクトが行われている国内の状況へと結びつく時代の流れをしっかりと認識することができた。

1990年に蔡國強を福岡へ招へいたとき、「(予算が少なかったため)蔡を自宅に滞在させながら制作を進めたのだが、このとき“レジデンス”というやり方に初めて出会った」という山野さんの発言に私は特に着目した。なぜかという「レジデンスをやるためにレジデンスをする」というような「アーティスト・イン・レジデンス/AIR」という言葉や形式に翻弄されている、主旨を曖昧にして言葉を借りているだけの、足元の見えない組織や事業が現在多く散見されるためである。この状況を多様と言うには都合が良すぎ、なんとも宙ぶらりんで違和感しかない。レジデンス組織が民間だろうが公立だろうが、アーティストのグループであれ、たった一人であれ「何のためにレジデンスをやるのか」「レジデンスをやる理由」の有無や内容が、私には気にかかってしょうがないのだ。山野さんが語った1990年の「レジデンスの原型」には、世間で学習済みのレジデンスの歴史とは違う単純明快な理由があった。それは「ローマ賞」の副賞が転じたというレジデンスの始まりの物語、欧州文化と態度の産物である“レジデンス”と現在の私たちとの間になんだか居心地悪くあった大きな空白を埋める、すごく当たり前でシンプルな動機だった。それは、どんな環

境であっても同時代の作品を創りたい、なんとかして見たい、という“誰か”がそこにいるだけのこと。これらの体験や経験への強い欲求と実践である。昔話などではないはずだ。さらに山野さんによれば、1994年のミュージアム・シティ・天神を契機にアーティストがひとつのエリアに多く集まり、住み始め交差する展開が、黄金町のプロジェクトの原型になったという。今回のプログラムを企画する中で、なぜ私がAIRの定義を一旦脇に置かなかったのか、“アジア”に期待したのか、アーティストが地域にいることとはなにかという原点にこだわったのか、すっとんと落ちた瞬間だった。

また、もう一点山野さんのレクチャーの中で、重要な投げかけがあったことを記しておく。「観客と作品の関係は不透明である、関係の不透明さを前提にしてプロジェクトをやるべきである。(アートが街に出て行くとき、出会う人には)その関係が不透明であるということがわかればいい。透明性はファシズムみたいなものである。(発言を要約)

この指摘は、アーティストが移動をするとき、地域を意識して仕事をするときに、またレジデンスがある特定の場所と関係を持つ以上、いつも自身のうちで鳴らすべきアラート、または達観であり覚悟ではないだろうか。

山野さんのレクチャーに導かれ、自分の着地点を確認し、アジアの同時代のアーティストたちの活動とのシンクロや彼らへの共感が生まれた。アジアのことは日本のわたしのことなのである。いまここで自分がいる場所と仲間を信じて、このまま進もう。黄金町のゴッドファーザーの温かくずしりと重い言葉に支えられた「アジアフォーラム」だった。

(レポート作成：小田井)

## アジアフォーラム

## Asia Forum

【一般公開プログラム】

December 17, 2016

18:30-20:30

## アジア：アーティストたちのサバイバル

プレゼンテーション：マーク・サルバトス/チュアン・マミ

マーク・サルバトス氏からは、マニラでのアート活動について紹介があった。アーティストとして、世界でも人口密度が高くさまざまな都市の問題を抱えるマニラをアーティストとしてどうサバイブするかが面白いという。そんな彼の作品は、拠点とするマニラの都市自体を巨大なスタジオと捉え、ストリートで展開した日常で目にするイメージを変容させる「サルベージュ・プロジェクト」。もう一つの「ラップ・プロジェクト」は、行き交う人々に持ち物の形を壁にトレスしてもらいながら、新しいつながりや関係性を生み出していくものである。

彼が共同設立した98B COLLABoratoryの出発点は、アーティストたちが気軽に集まれる場を持つという試み。最初は彼の住むアパートに毎週末アーティストを呼んで食事をしたりアートや人生のことを話したりするというものだった。現在はエスコルダという古い空きビルが多く立ち並ぶ地区に拠点がある。98Bは「What If?(もし〜だったら?)」という問いかけを元に活動している。アイデアを共有するアーティストトーク、滞在アーティストのためのAIRはスタジオがないのでホームステイ形式、アーティストの持続性を生み出すため、新しい支援や経済活動の場としてフリーマーケットを行うなど、マニラでアーティストたちが創造的活動を続けるためのサバイバル術として98Bが多くのことに取り組んでいることや、運営メンバーだけでなくその家族や友人もチームとして大切に考えて活動していることが伝えられた。

チュアン・マミ氏からは、ベトナムのアーティスト活動について語られた。同国では基本的にアートが認められていない。許可を必要とするが、その窓口がどこにもなく、アンダーグラウンド的に行うしかない。し

かも成功すれば注目され、スペースなどは閉鎖に追い込まれるという状況が繰り返される。

まずベトナムの文化状況の困難を表す3つの写真が紹介された。1つはベトナム戦争の頃に米国の仏教弾圧への抗議行動として焼身自殺した僧侶。そして1970年代にベトナム政府の弾圧から逃れようとするボート難民。最後にダンスの罪で逮捕される市民(1975年頃)。当時だけでなく、現在も規制が厳しく、彼がこの状況で作品発表するにあたってスポーツイベントと称して行ったのが「Chasing」である。国を代表するランナーを呼んで、狭く走りにくい室内で徒競走を行った。これがベトナムのアーティストの状況を表しているという。国際交流基金ハノイのライブラリーで開催された「Utopia\_No.1」は、誰のためのアートか、ベトナム人とは誰なのかという問いから生まれた作品で、彼の母親とともに室内に稲を植えたインスタレーション、そして普段そこへ足を運ぶことのない母親やその友人たちを招待、ただ会場に来てもらうというパフォーマンス。オープン翌日には警察から国際交流基金へ展覧会中止を求める連絡が入った。韓国で行われた「Myth East Mist」(2015)も、ブローカーによって韓国農家に嫁がされ奴隷のように生きる、ベトナム人女性の悲しい状況を見つめる作品であった。ベトナムの社会状況と常に対峙するアーティストの姿勢がある。(レポート作成：大友)



©Mark Salvatus

## Surviving in Asia

Presentation: Mark Salvatus / Tuan Mami

Manila, Philippines, with the highest population density in the world, is jam-packed with complex urban problems. As an artist, Mark Salvatus is fascinated and inspired by life and survival in urban spaces like Manila. In one of his art works, Salvage Project, he treated the city of Manila as his huge studio, creating corrected images by transforming everyday occurrences on the street into surprising unexpected situations. Another work, Wrapped project, produced fresh relationships and connections in reality through graffiti-esque wall drawings tracing objects passersby carried with them.

98B COLLABoratory (98B) is a collective art space he co-established. The motivation for this project was to build a place for artists to casually get together and have dialogues. At first, artists were invited to the apartment of Salvatus to talk about life and art over a meal every weekend. Then the space relocated to an area called Escolta in Manila occupied with old and vacant buildings. Currently, all the activities of 98B start with the question of what if? - what if we do this and that. This project includes artist talks for sharing ideas with other artists and non-artists, homestay style Artist-in-Residence projects in light of the lack of accommodation space in 98B, and creating a market for the sustainability of artists. This market includes seeks to drum up new supporters and audiences for community as well as exchanges of ideas and beliefs, and economic exchanges. 98B explores concepts and techniques of survival in Manila as artists in several different projects. Finally, family and friends of 98B organisers are important parts of their projects which again, addresses survival and life in urban areas.

A monk who self-immolated as a demonstration against pressures on Buddhism by the United States around the Vietnam war, Boat people who escaped from the oppression of the Vietnamese government in the 70s and a dancer in public arrested around 1975: these three pictures of Vietnamese cultural hardships were introduced to explain strict censorship and repression. A situation that continues up until now.

Tuan Mami presented about art practices in Vietnam where, first of all, art works face strict censorship due to the political climate. Indeed, art practices and performances require approval from the Ministry of Culture. However, because of the difficulties to contact this department art practices must occur under hidden circumstances and less publicity. Unfortunately, successful art pieces are a target of censorship and activities and artists are closed down repetitively.

Under these circumstances, Tuan organised public events such as a sports festival called Chasing in which national sports experts were invited to compete against each other in a small and narrow class room. This is one of the ways to exhibit art works in public and it represented the environment of Vietnamese art. A project called Utopia\_No.1, exhibited in library of Japan Foundation in Hanoi, was rooted in questions about art and life such as, art for whom, and, who is Vietnamese? Tuan and his mother created installations of rice fields in interior spaces, and as part of a performance, he invited friends and mothers who had never been to an art exhibition. The day following the exhibition opening, police officers contacted the Japan Foundation to close the show.

Myth East Mist (2015), exhibited in South Korea, was a project around the miserable situation of Vietnamese brides who arranged to be married with Korean men by middlemen. Overall, his artworks constantly demonstrate and intervene in the social situation of Vietnam.

## 参加者レポート

### 齋藤 ふみ Fumi Saito

札幌国際芸術祭 2017 コーディネーター

#### ●参加のモチベーション、課題

アーティスト・イン・レジデンス（滞在メイン）に限らず、通常の展覧会（制作メイン）のために長期でアーティストが滞在する際、どのような経験がアーティストにとって有意義なのか。また、どのように周囲の人々を巻き込んでいけるのか。

#### ●AIR CAMPを終えて

心に残ったキーワードは「だらだらする」。東南アジアのオルタナティブ・スペースをめぐる中で講師の小川さんが発見した言葉だが、これはアートスペースに限らず、私たちが日々を過ごす中でも必要な時間ではないか。講師の方たちに「コレクティブ」を続けるコツを尋ねた際の、喧嘩してもいいからたくさん話すこと（Mark）、それぞれを尊敬して、それぞれの役割に口を出さないこと（Mami）というアドバイスは、非常に印象的だった。そう思える仲間に出会い一緒に活動できることが、なにより素晴らしいことだと感じた。現在関わっている札幌国際芸術祭で自分が感じている課題と、レクチャーの中で出たキーワード「コレクティブ」と「シェア」を結んで、最後に感想を発表した。

実はAIR CAMPのプログラムが終わった後に印象的な出来事があった。残っていたメンバーで夜の札幌へ繰り出し、牡蠣とラーメンサラダをたらふく食べて日本酒を飲んで、葉巻を吸ってウイスキーを飲んで、腹を抱えて笑って、カチコチに凍った道で滑って転んだ。思うに、楽しいこととはたいてい、無目的で非効率的なことである。コレクティブやアーティスト・イン・レジデンスは、この「楽しい時間」をみんなで一緒に過ごすための仕組みのひとつではないか。そして本当は私たちの日々の生活もまた、出会った仲間や家族と楽しい時間を過ごすためにこそあるのではないか。技術的な学びも多かったが、自身の根本的なモチベーションを再確認するよい機会となった。

### 吉田 美穂 Miho Yoshida

#### ●参加のモチベーション、課題

アートそのものへの関心、自分の住む街でもっと身近にアートが存在するにはどうしたら良いか。

#### ●AIR CAMPを終えて

私の日々の生活には子どもがいます。そして、一人で育てていく中で、これまでたくさんの家族以外の人の協力を得ながら生活してきました。それをこのキャンプで学んだことと結びつけていきたいと思います。例えば、他の地域から子供をレジデントとして札幌に招き、地域の子どもたちとアートを通して交流するようなものなどです。札幌だからこぞできるアートプロジェクト、冬に行う雪のアートプロジェクトのようなものにも可能性があると思います。子どもが集まると、大人と違う発想が飛び交います。大人である私たちは、逆にその子どもの斬新な発想から学ぶ事がたくさんあると思います。

アジアでアート表現を実践する講師の人たちの作品を見て、アートは何かを伝える手段として間接的ではあるが、その対象について何かを考えさせるという強い力があるということを改めて思いました。



## 小林 大賀 Taiga Kobayashi

さっぽろ天神山アートスタジオ コーディネーター

### ●参加のモチベーション、課題

芸術と宗教の関わりについての興味、これからのアジアの芸術の発展についての興味。

### ●AIR CAMPを終えて

チュアン・マミさんの話から、自国でアートスペースを作ることの政治的な困難さと、それに立ち向かう怒りにも似たエネルギーを感じました。検閲を含むこのような問題はベトナムでは特に根深く、今後のアジアの発展にとって大きな課題であると感じました。日本の状況と比べ、政治的な理由からも、「芸術が担うもの」が非常に大きいように感じました。

アジアフォーラムや、小川さんのリサーチ・レポートを聞いたことで、しばらく現地に滞在することに匹敵するほどの経験が得られたような感じがしました。中国やシンガポールなどのマーケットベースで発展する文化芸術の話は最近よく耳にしていたのですが、他にもさまざまな国で地域に根ざした多くの魅力的なアート活動があるということを知りました。実際に現地を訪れてみたいという気持ちを強く持ちました。

## 佐脇 三乃里 Minori Sawaki

NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンター

### ●参加のモチベーション、課題

アーティストにとって有効的なレジデンスのあり方について考える機会を求めて参加。表現の方法や発表形態も多様化する中で、今の時代にあったアーティストの制作環境とは何なのか、ソフトとハードの両側面から考えたい。

### ●AIR CAMPを終えて

参加者の多くの方がそれぞれ異なる立場で既にAIRに関わっていることに驚きました。実際に現場を持っている人たちが参加して意見を交わすからこそ、それぞれがどのような手法でアーティスト(あるいは地域)と向き合っているのか、AIRのマネジメントに関して課題を共

有することも、教えてもらうことも多かったと思います。

国内に広がるレジデンス事業を行う機関をつなぐ機会として、今回のAIR CAMPのような手法は有効だと思いました。最終日のプレゼンテーションで“シェア”というキーワードを挙げましたが、参加者でありAIR実践者のみなさんと情報をシェアする関係を今後も継続的に行うことができれば、より豊かなレジデンス環境の実現に向けた計画をつくることができるのではないかと感じました。

## 松田 仁央 Nio Matsuda

ライター

### ●参加のモチベーション、課題

講師や発表内容への興味。

### ●AIR CAMPを終えて

合宿型のAIR CAMPということで、3日間、参加者や講師と寝食をともにすることで膨大な時間を共有することができ、たくさん隙間時間ができて、そのときにいろいろ話すことで仲間意識が生まれる。合宿形式の意義は、隙間時間にしか生まれないコミュニケーション、に尽きると思う。

初日の自己紹介の時間がゆったり取られていたこと(次回があるのなら、講師やゲストではなく、参加者の自己紹介により重点を置く方が良いと思う)、交流会、オープンダイアログ、アート&ブレイクファストの時間など、参加者の個人的な興味関心をピンポイントで話すことができるフリートークの時間がたくさん取られていたことが良かった。

## 蒲原 早奈美 Sanami Kamohara

京田辺市文化協会 文化コーディネーター

### ●参加のモチベーション、課題

京都府で開催されるAIR事業「京都Re-Search」に関わるにあたって、AIR事業や、アートプログラムについて、さまざまな地域や団体で活動されている方々との情報共有、関係づくり、AIR施設の滞在体験を目的として参加。

### ●AIR CAMPを終えて

これから京田辺市でAIRをしていく上で、地域にどういった効果が得られるのか、具体的に数字などを知りたいと言われます。「アーティストは一体何をしてくれるの?」など。誰かが何かをしてくれるということを求められる状況に、疑問を感じていました。関わる人に余計な負担をさせてしまうのではないかと、AIRは本当にこの場所で必要なのだろうか、と考えていました。私自身、AIRを経験したことがなく、悶々としていた時にこのキャンプの存在を知り、参加しました。講師それぞれが関わるAIRは、さまざまな形態をとっていて、大変参考になりました。参加者もさまざまで、いろいろな方がいろいろな事を悩み、考えているのだと知り、緊張していた気持ちが少しずつほぐれていきました。

また、合宿を通して、AIRはひとつの手法で、きっかけなのだ改めて感じました。つい、そこからの直接的な効果を求めてしまいがちになるけれど、アーティストにとっても、市民や行政にとってもひとつのきっかけになるように、ガチガチではなく、少しずつ輪が広がっていくようなAIRをいろいろな方と一緒にやってみたいと思いました。

## ラナ・トラン Lana Tran

アーツ千代田3331 インターナショナル・コーディネーター

### ●参加のモチベーション、課題

AIR事業のマネジメントと、運営に関する実際的な技術についての調査。アジアのアートコレクティブ情報の収集。AIR事業とまちづくりに携わる方との交流。アーティストサポートや施設運営のために有効な新しいアイデアの収集。3331スタッフとして初めて日本語でのプレゼンにチャレンジ。

### ●AIR CAMPを終えて

オープンダイアログでは、山野さんと、AIRプログラムにおけるコミュニティに対する責任と、アーティストからの要求にどの程度対応すべきかというバランスについてお話ししたことが印象的でした。

自分の最終プレゼンでは、今回のAIR CAMPで受けたレクチャーや、参加者との話し合いから見えて

きた疑問を解決する試みとして、新しいレジデンスの仕組みを提案しました。例として、私の出身であるカナダでの文化交流における論点について発表しました。その後、異なるもの同士の交流が促進されるような仕組みとして、寝台車のようにレジデンスのスペース自体が移動すると交流の形態はどのように展開されるのかを、例証しました。

## 藏田 章子 Ayako Kurata

Do a front

### ●参加のモチベーション、課題

山口県で自身の運営する団体でもAIRを行っているが、予算面、運営面などの悩みも多い。そもそもAIRというものが何か、初歩的なことから学び直したくて、参加しました。

### ●AIR CAMPを終えて

オープンダイアログなど、自由に質問できる時間が多くて良かったです。講師の方にも何でも質問できるような雰囲気があり、「同じ釜の飯を食う」ということの重要性を肌で感じる事ができました。特に山野さんの福岡のお話は、地域が近いため大変勉強になりました。今回新たにできたつながりを、自分自身の財産となるよう、これからも交流ややりとりが継続的につながると良いと思います。

合宿中は企画が盛りだくさんでもあり、逆に自分たちも、これまで受け入れたアーティストにタイトなスケジュールを組んでしまっていたのではないかと考えさせられました。自分が滞在者になることで、滞在者と運営側との距離感について考えることができました。

## 中里 龍造 Ryuzo Nakazato

### ●参加のモチベーション、課題

自分が主宰する映像制作チームや、構想中のいくつかのプロジェクトもあり、それらの進め方のヒントになるよう

なことを学びたいと考えた。例えば、特定の拠点となる場所は必要なのか、地域で有機的なネットワークを構築するためにはどうしたらよいのか、資金調達の方法など。

#### ● AIR CAMPを終えて

最終プレゼンは「道東リサーチプロジェクト(仮)」の企画。

北海道釧路市にあるStudio Lab Markという音楽スタジオ兼イベントスペースが活動10周年を迎えるにあたり、その活動をアーカイブして、次の10年、20年のビジョンを構想するようなプラットフォーム形式のイベントを行いたい。さまざまな領域とのコラボレーションによってプロトタイプを制作・公開していく「つくることを軸とした」プロジェクトの実施と、そのプロジェクトをバックアップしていく環境の整備(リサーチセンター、レジデンス、移動手段の整備)。

また、長期的には、取り組みの様子や課題、情報を有機的に結びつけるプラットフォームをオンライン上に立ち上げたり、定住ではなくフローな生き方(移動)に可能性を見出したりするモデルケースをつくりたい。

#### 柳沢 拓哉 Takuya Yanagisawa

八戸ポータルミュージアム はっち

#### ● 参加のモチベーション、課題

地方都市で行政直営の公共施設でのAIR運営に携わっている。行政以外に民間主導のアートプロジェクトなども盛んに行われて、市民が多様なプロジェクトに参加して多様な価値観に触れられる機会が増えるの良いと考えているが、結果的に行政の動きが民間の活動を抑制させてしまっている面もあるのかもしれない。オープンに市民と課題を共有したり、協働する場を作るなどの新しい取り組みを模索している。

#### ● AIR CAMPを終えて

目的の一つとしては、他の地域でアーティスト・イン・レジデンスを行っている人たちとのネットワークを構築することにあった。将来的にアーティストを紹介したり、リサーチのサポートをし合ったり、共同プロ

ジェクトを行ったり、様々な情報交換を行ったりすることができると思う。

現在AIRを運営している中で、二つのスタンスの違いについて考えていた。一つは、少数のアーティストに限定し、そのアーティストやプロジェクトや問題と丁寧に向き合うというもの。もう一つは、有象無象のアーティストを呼び込み、多種多様な活動が溢れることで結果的に地域の課題が露わになるというもの。今回の合宿を通して、やり方次第でどちらにも可能性があることを確認できた。

#### 漆 崇博 Takahiro Urushi

AIS プランニング 代表

#### ● 参加のモチベーション、課題

これまでの自身の活動の整理と、将来的な方向性の確認。

#### ● AIR CAMPを終えて

これまでのアートプロジェクト史を追体験したり、国や地域を越えて感覚を共有したりすることができた。

社会に介入するアートについて考えた時に、五つの相反する概念が共存しているのではないだろうかと考えた。1他人事と自分事、2パブリックとプライベート、3ポジティブとネガティブ、4日常と非日常、5個人と集団、の五つ。アーティストやアートプロジェクトの性質はそれぞれだが、この五つの要素を内包しているように感じた。

今回のAIR CAMPを終えて、自分の立ち位置を一種のアクティビストとして捉えることができるのではないかと考えた。自分が将来的にやっていきたいことは、アートプロジェクトのようなものを通じて、社会における自治意識の回復をはかっていくこと。他人事を自分事にするために、自分事を他人事にしていくコーディネートであると言える。

Pick up

## アーティスト・イン・レジデンスのorganicな未来

加藤康子 Yasuko Katou

(北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 博士課程)

アーティスト・イン・レジデンス(略称:AIR)は、日本では1990年代初頭に始まった。AIRを運営する機関が、アーティストやキュレーター等を一定期間招へいし、その創作活動やリサーチ、地域交流プログラムなど、滞在中の活動を支援する事業を指す。アーティスト等は宿泊のみならず、資金、情報提供、調査先とのコーディネート等、専門的なサポートを受け、創作や調査、研究に専念することが出来る。またAIR経歴が、アーティスト等にとってのキャリアパス形成の機会となることも意図されている。

2013年のニッセイ基礎研究所による諸外国のAIRについての調査報告書では、AIRが、多様で普遍的な価値に通じていること、芸術の生態系を支える重要なインフラであること、中長期的な時間軸の中でより大きなインパクトを生み出していること、等々が指摘されている。その社会的な重要性は、その後も、ますます高まっているように思われる。

マチにAIR機関があるということは、異文化圏のアーティストや調査者達が短期滞在中でも安心して来訪し仕事に専念出来るようなゲートが、世界に向けて常に開いている、ということである。AIRは、単なる宿泊サポートではない。アートに関わって仕事をする人々の、環境とニーズを理解しサポート出来る人材を擁した、ソフト面での都市インフラでもある。

AIRの担当者達は、実務を通じて「異質なもの」「新奇なもの」への許容力を鍛えており、それがそのまま、受け入れ拠点の寛容性となる。来訪アーティスト等を迎えては、彼らの目線に寄り添い、体験や情動を共にしながら有機的な関係を築く。また、日々の仕事で、国内外のアート現場の最新事情に接し続ける。AIRの存在は、経験と人脈と情報を蓄積した高度な専門

人材をマチにストックする、という側面を併せ持つ。

若く、伸びしろの大きな時期のアーティスト達が、異文化圏で「そこ」でしか出来ない経験や出会いを重ねることは、中長期的に見て、マチの文化のプレゼンスを国内外に発信する好機となる。それは10年後、20年後、中堅となったアーティストとの交流事業などに姿を変えて、新たな実を結んだりもする。

今回、さっぽろ天神山アートスタジオのAIR CAMP 2016では、アジアのAIR拠点の代表達から、自らのAIRの運営手法としてorganicという言葉が繰り返し語られたのが印象的だった。AIR拠点のメンバー間で、縦割りの序列や権威によらず、物事が自然に決まっていくように運ぶ運営方法だという。AIR事業を、アートを通じた外部との関係性のゲートとして考えた時、その運営においてもorganicという「制御しないで機能する制御」が最適化され実現しているという事実は、今後の一つの方向性を示しているように思われた。

短期的な成果を焦ることなく、organicな熟成の機が到来するまで、生身の身体の移動と受け入れの積み重ねを通じて、日本のAIR事業の今後の発展に期待したい。

「平成24年度文化庁委託事業 諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業報告書」株式会社ニッセイ基礎研究所、2013年3月29日

## 実践派で行こう!!

東方悠平 (NPO法人S-AIR)

### 1. AIR CAMP 2016開催にあたって

近年、アーティスト・イン・レジデンス (AIR) やアートプロジェクトは日本中でますます増え続け、その形態も多様化してきています。地域の美術館やアートNPOが主体となって行うもの、行政が音頭を取るもの、商店街が行うもの、運営の主体や資金、方法、目的などもさまざまです。こういった状況を、一過性のブーム、アートの搾取、アートワールドとの乖離、長期的なビジョンの欠如、場当たり主義、日和見主義、手段と目的の取り違え、島国の更なるガラパゴス化…(書いていて嫌になりました) などとくさしてしまうことは造作もないことです。私たちはこれまでも、オリンピックや万博などの国家的イベント、ハコモノ美術館の建設、パブリックアートによる彫刻公害など、多くの悲惨な事例を目にしてきています。

この状況を、評論家然とした上から目線で否定・拒絶することは、簡単で安全な行為かもしれません。けれども、一応はアートが目玉を集め、人やお金が以前よりも動く、活気付いた状況であることは事実です。放っておけば勝手にシーンが良くなっていくわけでもないのだから、覚悟を持って状況を引き受けて、清濁併せ呑み、前進していく実践者でありたい、と思います。そう、最近、何かが変わえられそうなエネルギーがフツフツと湧いているような気だけはしています。(思い込みは、実行のための重要な動力源の一つです。) そんな、漠然とでも何かを変えたい、何かができる気がすると感じている人の背中をポンと押しつたり、そういった人たちが連携したりする手伝いを、このAIR CAMPが担うことができれば嬉しく思います。

AIR CAMPは、正解と思われる画一的なフォーマットを教授したり、派閥を作って徒党を組んだりす



るためのものではありません。「アクティブ・ラーニング」や「能動的な学び」などと流行りのキーワードを繰り返すとまた胡散臭くもありますが、参加者それぞれが自身の課題やそれについてのアイデアを見出して持ち帰り、その後の実践を通じて常に問題意識をアップデートし続けられるきっかけとなるよう企画されています。結果として、日本各地で多様に展開するアートシーンが作られていくことを目指しています。

### 2. 広がる有機的なネットワーク

参加者や講師が個人ベースの実践者としてつながっていくことも、AIR CAMPの重要な要素です。前回2015年度の参加者がそれぞれの地域で実際に行っている活動は、福島県でのAIR、北アルプスでの国際芸術祭、四国の商店街での展覧会、長野での地域住民が参加するワークショップなど、物理的には離れていても、インターネットやSNSなどを通じて様子を伺うことができます。同じ時期に札幌へ集まりAIR CAMPに参加し、それぞれの場所へ戻っていった参加者同士の横につながるネットワークだけでなく、彼らが2016年度の参加者ともつながる縦のネットワークの可能性も広がってきています。それは、AIR CAMPを長期的に続けていくことの意義の一つでもあります。それぞれの活動や気付き、成長をも、このように有機的に広がるネットワークで継続的にシェアできるのではないのでしょうか。



また、前回と今回の参加者に共通する特徴の一つとして、地方在住者の多いことが挙げられます。アーティストや学芸員、芸術・美術系学生がいて、アート関係の仕事も豊富な首都圏に比べると、地方では理解者やサポーターも多くはないのかもしれませんが。そういった人たちにとって二泊三日の合宿でつくられた濃厚な人間関係は、普段は身の周りにいない種類の人からの刺激的な学びの場となったり、地方でサバイバルするための具体的なアドバイスをもらえる場となったりしているようでした。また、それぞれの場所に戻ってからも、自分と同じような志を持って頑張っている人が他の地域にもいるという精神的な支えにもなっているようです。

### 3. 多様な実践への後押し

とにかくアートプロジェクトを始めてみよう!と謳った前回のAIR CAMPに対して、2016年度はアジアの多様性を切り口に、地域との付き合い方について考えるものでした。そこにもまた決まった答えがあるわけではなく、アートプロジェクトには企画者や地域によってさまざまな付き合い方の可能性がある、ということを示しました。ひょっとしたら、地域とはあまり付き合わない、という方針のアートプロジェクトもありうるかもしれません。

今回の参加者は、南は山口から関西、関東、青森、そして北海道内から。すでに自身でAIRを行っている

人や、これから始める人、AIRの施設でスタッフとして働いている人や、漠然とアートを仕事にしたいと考えている人、アートプロジェクトとコミュニティの関係について研究を行う人など、そのバックグラウンドやキャリア、想いはそれぞれ異なりました。だからこそ、特定の型を求めるのではなく、各々の強みを生かし、その場所でこそ成立する意欲的なものにチャレンジしてほしいと考えました。

講師陣も、アジアの多様性という観点からさまざまな人にお願いました。共通していたのは、いわゆる欧米目線の価値基準とは異なったスケールを持っている点です。例えば、事例として紹介されたアジアの「アートコレクティブ」や「オルタナティブスペース」と呼ばれる活動は、コマーシャルやアカデミックなアートと部分的には重なりつつも、それらとは異なった価値観によって運営されていました。自分たちのアイデンティティとは何か、自分たちにとってのリアルなアートとは何かという問いを持って行われる真摯な活動や理念が紹介され、シェアされました。こういった活動が日本で行われる場合、「欧米のやり方とは違う」「アートとは呼べない」「税金の無駄使い」などと批判されることも少なくありませんが、AIR CAMPを経ると、それらが非常にちっぽけで限定的なものの見方に囚われたものであることに気付かされます。アートって本当はもっと広大で肥沃な可能性があり、私たちはそれに魅せられて今ここにいるのではなかったのか。ありがちな批判の声に怯むことな



く、行動あるのみ。実践の過程で、それまで想像もしなかった新しい出会いや飛躍がいかようにも起こりうること、またその過程にこそ、多くの可能性が存在していることを確認することができました。このことは、上述のような多様な参加者がこれから行う芸術的活動の多様性の担保と、その一歩を踏み出すための背中を押すことになったのではないのでしょうか。

#### 4. 走りながら考える

AIRやアートプロジェクトの興盛によって、関係する言葉が独り歩きして起こる「こういうものだから」「こうでなければならない」といった息苦しさは、日本的とも言えるのかもしれませんが、そもそもアートは、そういった固定概念を疑ったり脱臼させたりしながら、凝り固まった状況を転換するような力を持ったものであったはずなのに！今回紹介されたアジア的な実践の数々は、それぞれの場所や生活を見つめ、地域と付き合い、そこから立ち上がるアートの可能性を信じて行われており、新しいオルタナティブな価値観を探るものでもありました。

合宿を終えたところで、まだそこになにか絶対的な答えが見出されたわけではありませんが、今後も各地でさまざまな形で実践者たちが硬軟入り混じったアートプロジェクトを行い、時には失敗しつつも、多様なアートシーンとそれによる豊かな世界が作られていくことを願うと同時に、自身もそのための一人の実践者であり続けたいと思います。



## Let's Get Active!

Yuhei Higashikata  
NPO S-AIR

### 1. Introduction

In recent years, Artist-in-Residence (AIR) and art projects are increasingly popular all over Japan. As a consequence, each project runs an extremely broad range of operations in terms of organisational structure, finance, objectives and management. In particular, project organisers collaborate across various fields from local art museums, to art NPOs, to regional governments, to local commercial strips. Criticism of this phenomenon has often assumed the form of simple negation, citing trends like temporary art booms, instrumentalisation of art, separation from the art world, lack of long-term vision, playing it off the cuff, opportunism, misunderstanding of ends and means, furthering the Galapagos effect of the island nation mentality... (at this point I begin to feel terrible), disregarding the fact of miserable national events in the past, such as the Olympics, international expositions, construction of white cube museums and public sculpture "pollution".

Though imperfect, the current atmosphere of art in Japan is rather active compared to the past. Art projects attract more attention from society, which leads to possibilities of funding and circulation of artists and people involved in the project. Under this condition, some posing as critics seem to seek straightforward answers and refuse this situation securely and effortlessly without actual involvement. Contemplating the

art scene contributes little toward progress, so that personally I approach this situation as a practitioner who is tolerant of all events in the march forward. Indeed, I sense some energies that guide positive changes in society are gushing up. Imagination is a power source of action.

Obviously, to start and progress on the journey of an art project in reality requires several steps, including self-criticism, outlining a plan and finding collaborators. In such event, AIR CAMP facilitates building new relationships between motivated organisers, to support their goals and to encourage practitioners who may have unarticulated, vague anxieties about society. The basic principle of this event is active learning: an opportunity to consider and exchange opinions around ideas between participants in the form of a workshop, after which we return again to our local areas to realise the projects. Thus the aim is neither lessons with fixed answers, nor forming art gangs. As a consequence, AIR CAMP strives for expansion toward diverse ranges of art projects occurring all over Japan.

### 2. Expansions of organic network

Another crucial point of AIR CAMP is to link participants and lecturers rather as parallel relationships between active practitioners. In 2015, organisers from a plurality of backgrounds — an AIR in Fukushima, the Japan Alps Art Festival, an exhibition at a commercial strip in Shikoku, a workshop with local community in Nagano — came together to build horizontal networks in Sapporo, communicating moreover through internet and social networking sites despite physical distances. In addition, participants in 2016 are potentially connected to

groups from previous years through an organic web. Therefore the continuity of AIR CAMP is crucial as members of networks develop their sharing activities and track the development of each project over long term bases.

This year as well as last year, one of the main characteristics of participants was provenance from rural areas of Japan, where supporters are limited and there is little interaction with art in their communities. In fact, larger cities tend to concentrate artists, curators, and art students. For this reason, over the course of the 3 days of art management camp, participants from rural areas engaged and bonded with their colleagues whose similar experiences and obligations generated inspiration and real advice for survival. This contributed to their sense of purpose even after returning to their respective communities.

### 3. Providing assistance for diverse action

In 2016, the topic addressed was how to engage local community while considering more the position of art and cultural diversity in East Asia, as contrasted with the previous year's simple focus of starting up art projects. AIR CAMP presented art projects containing numerous possibilities reflecting issues from every single community, not packaged into a homogeneous format. Perhaps, there even exist some art projects without specific engagement from local communities, according to the direction of organisers.

Participants from diverse backgrounds and careers such as AIR organisers, start-up AIR initiators, staff members who worked at AIR institutions, researchers in the relations between art projects and community, and those who vaguely desire to work in art related jobs, came

together from everywhere in Japan. With this special quality as backdrop, presentations and discussions attended to the challenges in each community with the benefit of local specificity and without following particular formats.

The varied range of speakers with perspectives on cultural diversity in East Asia had the common aspect of offering a contrast to Western values of art practices. For instance, some art collectives and alternative spaces in East Asia overlap commercial galleries and academic art, though managed with their own distinctive principles. Some organisers shared their experiences of transformative projects and activities that question their own identity or the relevance of art in the conditions of their specific environments. Such art practices are often exposed to dismissive evaluations by art critics and artists in Japan, who may not perceive a value in differing from Western norms, or claim that it is not art, or that it is waste of public money. However, these are limited and too simplified frames of reference from the perspective of AIR CAMP. Then, the question arises whether people involved in the field of

art are really fascinated by openness and rich potentials of art?

With such a scope, art project practitioners must advance without flinching at ordinary skepticisms. By producing art projects, organisers witness unimagined new relationships and rapid development, and this ongoing process generates new channels of opportunity. In this regard, this event provided participants with supportive advice for proactively initiating activities of their own design and ensuring diversity within their programmes.

#### 4. Think while running

As a result of the popularity of Artist-in-Residence and art projects, a particular Japanese characteristic is that some organisers and artists feel smothered by the particular idea that it should be an art project. This concept goes beyond the control of the actual project. Here again, to begin with, art is the power and the way to break through traditional and universal perspectives to release the singular and to rotate situations!

In presentations by lecturers and participants, project organisers are convinced of the potential to launch an art project as a result of grasping onto locality and its life and to begin harmonizing with their communities. A variety of Asian practices showed the process of searching for value systems outside those existing. No conclusion was pronounced in this event, however, my wish is that Japan will be pervaded with numerous gentle and edgy art projects, including failed ones, which result in a diversity in the art scene, in order to induce a rich world. And I would love to get active for it.



アーティスト・イン・レジデンス事業 人材育成キャンプ&フォーラム アジア AIR CAMP 2016 冬

主催：特定非営利活動法人 S-AIR

助成：文化庁 平成28年度 アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業、国際交流基金アジアセンター

企画：小田井真美(さっぽろ天神山アートスタジオ)

運営事務局協力：大友恵理、寺岡桃、さっぽろ天神山アートスタジオ

協力：AIR NETWORK JAPAN, MOVE ARTS JAPAN

記録集デザイン：小川陽

翻訳：植村絵美

印刷：札幌大同印刷株式会社(www.dioce.co.jp/daido/)

編集・発行：特定非営利活動法人S-AIR

2017年5月発行



